第116号　2018年9月15日

東日本大震災 復興･支援活動ニュースレター
カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

毎月のように自然災害が発生し、支援を求めている方が日本各地にいる中、今年も夏休みを利用して、東日本大震災の被災地にあるカリタスベースで、多くの学生の方が活動してくださっています。今回は、大船渡ベースが大阪女学院の学生さんに企画と準備をお願いして実施した西日本豪雨被災者支援のためのチャリティー縁日の様子とその活動に参加した大阪女学院の生徒と卒業生の感想、南三陸ベースでの活動が恒例となっている東京暁星高校の生徒さんたちの感想、宇都宮海星女子学院の「亘理ボランティア」の様子をご紹介します。

最後に、９月４日、台風21号が近畿地方を中心に大きな被害を出しました。また、北海道では、その台風の影響を受けた直後の６日午前３時７分、最大震度７を観測した北海道胆振東部地震が発生しました。被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

西日本豪雨被災者支援のため
チャリティー縁日を開きました！

カリタス大船渡ベース　今井 久美子

８月11日(土)、カリタス大船渡ベースでは西日本豪雨チャリティー縁日を行いました。

今回のチャリティー縁日は、2013年からボランティアとして来てくださっている大阪女学院の学生さんに企画と準備を進めていただきました。当日は、ご家族連れで来てくださる方、隣近所のお知り合いと誘い合って来てくださる方など、たくさんの方でにぎわいました。

室内ではゲームの景品のスナック菓子などをおいしそうにほおばる子どもたち、その横はお父さんやお母さん方の交流の場となり、また、久々にお会いする方々が、話に花を咲かせる集いの場ともなりました。外のブースでは学生さんと地域の方々との交流で、にぎわいました。

東日本大震災後の訪問活動の中で、「全国の皆さんの支えがあって今まで生きてこられた、ここまで立ち直れた」という言葉をよく耳にします。今回の西日本豪雨で被害にあわれた方々の悲しみや苦しみ、不便な生活、不安な日々を送っていらっしゃることを思うと胸が痛くなります。少しでも支えになりたいという大船渡ベース、地域の方々、暑い中頑張ってくださった女学院の生徒の皆さんの温かな心、思いとともに義援金を届けたいと思います。

（写真左）菅原ベース長から水ヨーヨーの作り方を学ぶ生徒の皆さん
（写真右）ストラックアウトを楽しむ子どもたち

～大阪女学院の方々の感想を紹介します～

８月11日（土）午前10時～午後３時の間、西日本豪雨チャリティー縁日が大船渡ベースで開催されました。

かき氷、たこせん、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、輪投げ、ストラックアウトの計６種の出し物をしました。天気が晴れていたこともあり、近所の人も、遠方の方も、多数の方々がお越しくださいました。

「たこせん」は、たこせんべいの上にソースとマヨネーズをかけたもので、大阪のお祭りでは定番の食べ物なのですが、こちらの方々には馴染みがないらしく、皆さんが興味津々に「これは何？」と聞いてくださるのが、どことなく異文化交流のようで楽しかったです。

大阪のような都市では地域間の交流があまり活発ではないため、今回の縁日では年代の違う方々のつながりを身に染みて感じることができ、良い経験になりました。お越しくださった皆さんありがとうございました。　高校２年生　大川 綾香

お天気にも恵まれ、外で楽しくヨーヨー釣りをする子どもたち

縁日のお手伝いを今回のボランティアで初めて経験しました。事前にたくさんのチラシ広告をスタッフの方が配ってくださっていたおかげで、大勢の方が訪れてくださいました。

縁日当日は快晴で気温も高かったので、特にかき氷をたくさん買っていただきました。小さい子どもたちが元気に走りまわっている様子は、とてもほほえましかったです。

大阪出身の私は都市部に住んでいることもあり、他の地方に住む方との交流は少なかったのですが、今回の縁日では、普段からこの地域のお年寄りや子どもたちがみんな知り合いのようで、いろいろなお話をしていらっしゃる姿を見て、とてもうらやましかったです。

皆さん「どこから来たの？」「遠い所から大変だったね」と私たちに声を掛けてくださいました。地元の人同士だけではなく、他の地方から来た私たちにも同じように優しく接してくださる姿に、すごく心が温かくなりました。

最初はうまくいくか不安でしたが、地域の方の温かさに触れ、私もとても楽しく過ごすことができました。また、多くの方とお話し出来るよう絶対に戻って来たいです。卒業生・大学２年生　光成 くる実

大人も子どもも笑顔あふれる時間となりました

カリタス南三陸ベースでのボランティアに参加して

東京暁星高等学校

私は南三陸ベースでのボランティアの参加は、今回で３回目でした。活動の内容は、初日はいちご農家さんでいちごの苗を支えているピックを抜く作業をし、その後、ビニールハウスの掃除をしました。２日目は漁港で牡蠣についたフジツボなどをとり、きれいにする作業を行いました。３日目は２日目とは違う漁港で、浮き球についたフジツボなどをとり、その後牡蠣の稚貝を育てるためのホタテの貝殻をワイヤーにさしていく作業を行いました。全ての作業がとてもやりがいのある仕事で、私自身もより頑張ることが出来ました。

今まで農家さんのお手伝いには行ったことはなかったのですが、いちごを育てるのに２年かかることを知り、さらにビニールハウスの掃除では、感染病対策のためとてもきれいに掃除しました。私たち５人と先生と農家さんの７人でビニールハウスをきれいにする作業をしましたが、２時間作業をしても終わらせることが出来ませんでした。その作業は普段は農家さんだけでする作業であり、またいちごの生育には長い時間がかかり、自然の猛威もあることを思うととても大変な仕事だと思いました。

牡蛎の稚貝を育てるためのもの

２日目にお世話になった漁師さんのところは、４回目の訪問となり牡蠣の作業をしましたが、難しい仕事なのでうまくこなすことは出来ませんでした。漁師さんはテキパキとこなしていき、その姿を見てかっこいいなと思い、美味しい牡蠣がいただけるのもこうした日々の努力の賜物なのだと尊敬しました。

３日に行った漁港は２回目の訪問でしたが、大小の浮き球を掃除する作業もなんとか午前中に終わらせ、午後も力を合わせてホタテの貝殻をワイヤーにさす作業を無事に終わらせることが出来ました。それは、漁師さんから教えてもらったことをみんなで力を合わせて作業出来たからです。漁師さんをはじめ、みんなに感謝したいと思いました。南三陸ベースでの作業は今回も様々なことに気づかされるものとなりました。また機会があったら足を運んで全力で頑張りたいなと思いました。

宇田川　海渡

ホタテの貝殻にワイヤーを通す作業

私は今回で、２回目のボランティアの参加だった。今回は、農業や漁業の作業の他に、震災の遺構を訪れることもできた。様々な貴重な経験を通じて、普段は考えないようなことにまでも思いを巡らせる良い機会となった。その中でも、最も印象に残っていることについて記したいと思う。

それは、すでに収穫を終えたハウスの清掃をしていた時に、いちご農家の方がおっしゃっていた「少しでも土が残っていると、伝染病で全滅してしまう」という言葉だ。その作業を行ったのは、午後、その日の作業ももうすぐ終わりという時間帯だった。そのため、気温や疲れ、飽きなどの要因で集中が途切れてしまい、作業が雑になってしまっていた。

私は、その言葉を聞いてようやく、活動中に肝に命じているべき、「寄り添う」という考え方ができていなかったのだと気がついた。たとえ、私にとっては「少し気が緩んだ」だけであっても、それが故に農家の方々に甚大な損害を与えてしまうかもしれない。そのような、容易に想像がつくことにも思いが至らなかったのは、心の中のどこかに「助けている」というごうまんな考えがあったからだと思った。

今回の活動を通じて改めて人手不足を痛感し、ボランティア活動の継続の必要性を再確認した。私自身は次にいつ、参加出来るか分からないが、今日まで繋がれて来たボランティアのリレーを絶やさず、現地の人に寄り添った復興が一刻も早く進むことを切望する。

最後に、私たちがさせていただいたお手伝いが少しでもお役に立てたことを願いたい。

山東　真樹

（写真上）旧戸倉中学校（現　戸倉公民館）
時計の針はあの日から止まったまま…
（写真左）震災時の高野会館のお話しを実際の建物を見ながら伺いました

今夏に南三陸のボランティアに参加させていただきました。春には釜石でも活動させていただいたのですが、まだまだ復興は進んでいないんだなと知りました。自分が少しでも何か被災者の方々のためになったらなと思い、今回も活動に参加しました。

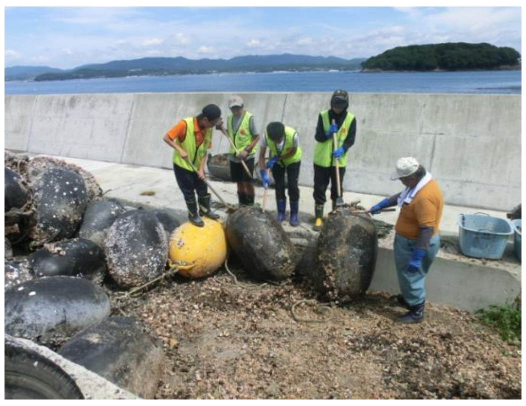
四泊五日はあっという間に過ぎて行き、とても短かったように感じました。その中で特に驚いたのは、いちご農家に行った時でした。まずいちごになるまでに二年もかかるということです。またいちごの苗はとても手のかかるもので、いらない葉を除いたりとたくさんの作業をしてあげなければ、きれいないちごは出来ないのです。僕は今までそのような努力があるんだと考えながら食べたことはありませんでした。いちごは二年間の努力の結晶なのです。しかし、その結晶はあの日津波によって流されてしまったと聞きました。農家にとってみれば、生きるすべを無くしたようなものです。そんな絶望を超えてまたいちごを育てているのですが、人手不足ということでボランティアを必要としていました。

ビニールハウス内での作業

暑いビニールハウスの中で腰を曲げての作業はとても大変でしたが、色々な事を学ぶことができ良い経験を積めたと思いました。ただ最後に、農家の方が「そろそろ自立しなければならない」と言っていたのが、まだ心に残っています。自分たちでどうにかしようとしたくてもどうにも出来ないもどかしさとまだ闘っているのだろうと思いました。震災がもたらした傷痕は、まだ完全には癒えてないと知り、これからも被災者の心と寄り添いながら支援を続けていくことは必要だなと思いました。

僕はまた機会があれば絶対に被災地に行くつもりです。自分の手で手助け出来ることは限られています。しかしやらなければ何も起こりません。現地の方々もボランティアが来ると、「まだ自分たちは忘れられていないんだ、良かった」と言います。未だに傷が残っているこの東日本大震災の恐ろしさを風化させてはいけないと強く感じました。また、このことをより多くの人に伝え、未来に備えられればと強く思いました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤木 琉成

苗を傷つけないよう慎重かつ迅速に！



漁具の清掃のお手伝いをしました

今回僕が参加した活動は、いちご農家の手伝いと漁業のボランティアであった。一番辛かったのはいちご農家の手伝いだった。ビニールハウス内のとても暑い中、いちごの苗に気をつかいながら手入れをするという仕事であった。僕ら６人が一日中作業をしても全体の半分も終わらせることができなかったのに、普段はたった二人だけで全ての作業をこなしていると知って頭が下がる思いがした。初心者の僕らでは全然作業が終わらなかったにも関わらず、最後に農家の方が「手伝ってくれて助かった。ありがとう」と言ってくれて、僕らもその言葉がとても嬉しく大きな達成感を得ることができた。たっぷりと汗をかいて一生懸命にやった作業のあとには、温泉が待っていた。普段、東京にいる時には絶対に感じることのない温泉に入れるという喜びにも気づくことができた。

今回の活動において、漁業でもいちご農家でも普段僕らがなにげなく食べているものは、僕らの気づかないところで沢山の人が一生懸命に汗をかいて作ってくれたものであると改めて気づかされた。

震災から７年が経った今でも街のいたるところに震災の爪痕が残されているなかで、やはり世の中ではだんだんと震災の記憶が風化されつつある。そんな中、今回僕らが被災地の復興に少しでも貢献することが出来たのは良かった。この活動でえられたものはとても大きいと思う。また機会があったら是非とも参加したい。　　　　山田 祐輔

今回活動を共にした皆さんとの一枚

東日本大震災から７年が経ちました。

僕はこの夏、ボランティア活動で南三陸に向かいました。昨年、家族で九州旅行をした際、まだ復興していない場所や災害の爪痕を目の当たりにし、場所は違いますが、被災された方々の役に立ちたいと考えたからです。

最初に到着した仙台駅などは、都内と変わらず復興していました。しかし、移動中に車内から見た景色や津波の被害が大きかった南三陸は、胸に来るものがありました。バッとひらけた何もない土地。津波がこの高さまできたという標識。鉄筋むき出しの防災庁舎。津波当日、防災庁舎３階建て屋上（地上 12m）に約 50 人が逃げましたが、津波がその高さに到達し、次々と流され 10 人しか助からなかったそうです。自然災害の恐ろしさに圧倒されました。

いちご農家の手伝いをさせていただきました。以前は菊も手掛けていたそうですが、多くのハウスや機械が無くなり、今では二つのハウスを頑張ってご夫婦２人で営んでいるそうです。独り立ちしたいが、ボランティアの力が必要だとおっしゃっていました。ビニールハウス内で感染症が起きないように、砂や蔦などを除去しました。時間内に全て終わらず、申し訳なく思いました。休憩時にはマンボウときゅうりの和え物を出してくれました。活動中、いろいろな場所で、飲食物をいただきました。見合うよう頑張らないといけないと思いました。

にじのわの夏祭り
手作りのお御輿をみんなで担ぎました！

漁港で、浮きに付着した貝やフジツボなどをへらでとる作業や、障がいのある子どもたちが通う施設「にじのわ」で夏祭りの手伝いをしました。浮きの作業は、かなりの力仕事なのできれいにできて良かったです。「にじのわ」のみんなが、元気でかわいくて、喜んでくれたので嬉しかったです。

地元の方々に受け入れていただき、ボランティアという貴重な体験をさせていただき感謝しました。たくさんの事を抱えながらも頑張っている人々とふれあい、私も一日一日しっかりと生きなければと思いました。また活動に参加したいです。　　　　　　　　　　　若林 孝明

（写真左）旧南三陸防災対策庁舎
（写真上）皆でしばらくお祈りをしました

宗教教育としてのボランティア

宇都宮海星女子学院非常勤講師・さいたま教区司祭　藤田　恵神父

2012 年より宮城県亘理町でボランティアを始めた宇都宮海星女子学院の「亘理ボランティア」は、今年も７月 14 日、15 日に七回目のボランティアを実施し、生徒 17 名と教員３名が参加し、無事に終えることが出来ました。ご協力いただいた亘理教会、白石教会、マリアの宣教者フランシスコ修道会(FMM)亘理修道院、NPO 法人「亘理いちごっこ」、森ファーム、大沼敏修さんにお礼申し上げます。

今年は、海星のボランティアを宗教教育の面から報告します。なぜなら、ボランティアは宗教の授業で話す世界観を実際に体験することだからです。

初日、集会所でのボランティアを２か所で行いました。１か所の会場では、最初１名のみの参加者でした。この日は、快晴で気温は30度超。「冷房の効いた部屋からわざわざ集会所に外出するのはおっくうだから」との解説に、２名一組で、生徒たちによる災害復興集合住宅での呼び込みを始めました。

亘理いちごっこで真剣に話を聞く生徒たち

以前は「亘理いちごっこ」に事前に広報して集めていただいていましたが、呼び込みもボランティアに必要なこととして行い、最終的に18名も参加してくださいました。

予想外の出来事でしたが、「呼び込み」というボランティアの人集めの苦労を、図らずしも体験することになりました。人に接するには、勇気を持って自分から近づかねばなりません。そのことを教えられました。

交流会では、最初に「亘理いちごっこ」のお弁当を、被災した参加者の方と一緒に食べました。食卓を囲み同じものを食べることは、ミサの精神です。

食事がきっかけとなり、生徒と話したい人は会話を続け、花札の坊主めくりやトランプのババ抜き、塗り絵など、それぞれがやりたいことをやりました。

復興住宅に住む方々と一緒に楽しむ時間をもつことができました

意外だったのは、被災者が「聞いて欲しいの」と被災体験を話したことです。ある生徒は、震災を被災者に思い出させてはいけないと思っていましたが、図らずも話の聞き役に。また、ある被災者は「被災したことで、このコミュニティーが出来た。震災は辛かったが、悪いことばかりではない」と話し、生徒は感動していました。

いちご栽培をしている森ファームでのお手伝い

２日目は、森ファームでのボランティア。森さんの奥さんが震災で心に傷を負ったものの、いちご栽培を通して癒しを受けた話に生徒たちは感銘を受けました。癒しとは何か？生徒たちは示唆を受けました。

お昼前に亘理教会のミサに参加し、小さな聖堂でのミサを初めて生徒たちは体験しました。ミサ後には内陣を隠して教会のカレーライスをごちそうになりましたが、聖堂を食堂に使うことに驚いている生徒もいました。ミサは食事でもあるのです。

帰り道に角田市の大沼さんが彫った仏像の庭に寄って、その作品群を見学しました。最初は1,000体の目標だったが、気に入っていた仏像をプレゼントしてしまったことから、最終的に２万体を目指しているとのこと。死者のために祈るとは何なのか？生徒たちは考えさせられたように思います。

ボランティアは、人が他者の悲惨な状況を見て、同情心から支援したり助けたりするヒューマン（人間性）なものと思われがちです。しかし、カトリック校のボランティアは、キリストの愛の教えを学んだ人間が、キリストの手、キリストの足となって、キリストのみ旨を実現する実践の場でもあります。その思いを強くした２日間でした。

（写真左上）
亘理教会で、ミサに参加した後、信徒の皆さんと一緒に昼食

（写真右上）
宇都宮海星一期生である FMM の Sr. 大垣のお話を聞く生徒たち

（写真左下）
仏像を彫る大沼さんから、実際に作られた仏像を見せてもらいながらお話を聞きました

北海道胆振東部地震被災への支援について

カリタスジャパンは、今回の北海道胆振東部地震災害に関して緊急募金は行わず、手持ち金で賄うことを決めました。また、札幌教区ではカリタスジャパンの支援対象外である教会関係施設の修復等に必要な資金およそ１千万円の支援金を募ることにいたしました。
札幌教区で募る災害支援金への皆さんのご協力をお願いします。

【札幌教区　災害支援金の振込口座】

郵便振替番号：　０２７４０－８－３５３２９

加入者名：　札幌カリタス

※　通信欄に「災害支援」「北海道震災支援」「胆振東部震災支援」などと明記してください。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

＜西日本豪雨災害　救援募金（カリタスジャパン）＞

カリタスジャパンでは、西日本豪雨災害による被災者の救援活動を行っていくため、救援募金の受付を行っています。お寄せ頂いた募金は、被災地の教区と連携して推進する救援活動のために活用させていただきます。

【西日本豪雨災害　救援募金受付口座】

郵便振替番号：00170-5-95979

加入者名：カトリック中央協議会カリタスジャパン

通信欄に、「西日本豪雨災害」とご明記ください。